

〔日本書紀二十八〕元年六月甲申、是日發途入東國、略中大野以日落也、山暗不能進行、則壞取當邑家、離爲燭、及夜半到隱郡、焚隱驛家、略中將及橫河、有黑雲廣十餘丈、經天時、天皇異之、則舉燭親乘式

占曰、略下

〔令義解五〕凡理門至夜燃火、謂內及中外三門、并大器貯水、監察諸出入者、皆衛士燃火也、

〔延喜式四十六〕凡諸節會日、若入夜者、令衛士進乘燭、其數十人、若有蕃客者廿人

〔詞花和歌集七〕題えらす

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士のたく火の夜はもえ晝は消えつ、物をこそ思へ

〔今物語〕近き御代に、五節の比ゆかりにふれて、たれとかやの御局へ、或女のやんごとなき、忍びて参りたりける事ありけるを、ちときこしめして、いかで御覽せんと思しけるまゝに、俄にをしいらせ玉ひけり、とりあへずともし火を人のけちたりければ、御ふところより、くしをいくらも取いで、火びつの火に、うちいれ給ひたりければ、おくまで見えて、よくく御らんじけり、御心のふせい興ありて、いとやさしかりけり、

〔璫囊抄十一〕万燈會トテ多火ヲ燒ヲ、俗人常ニ由緒ヲ尋ヌト云共、未ダ其所由ヲ不知其儀如何、

万灯會ノ事尤モ由緒アリ、一卷ノ菩薩藏經曰、燃十千灯明懺悔衆罪云云、十千ト云ハ是万也、又性靈集ニ、高野山万灯會ノ願文アリ、其詞云、

於金剛峯寺、聊設万灯万華之會、奉獻兩部曼荼羅四種智印、所期每年一度奉設斯事、奉答四恩、虛空盡、衆生盡、涅槃盡、我願モ盡ント云云、

大師是程ニ誓願シ給、豈少功德ナランヤ、サレバ世流布ノ詞ニモ、長者ノ万灯ヨリ貧者ガ一灯共申メリ、

〔倭名類聚抄十二〕燈モテモ火モ具モ燼モ

左傳注云、燼音毛音江音久音比、火餘木也、